

## ホモトキシコロジーで治療した犬の口唇の上皮向性皮膚型リンパ腫の1例

○大池三千男<sup>1)</sup> 中群翔太郎<sup>2)</sup> 渡邊謙一<sup>2)</sup> 古林与志安<sup>2)</sup>

1) おおいけ動物病院 2) 帯広畜産大学

【はじめに】近年、手術、抗癌剤、放射線療法などの治療は望まず、痛みや副作用の少ない補完代替療法を望む飼い主も増えている。ホメオパシーは単一成分製剤を限りなく希釈して使用する同種療法で、古くから世界中で行われている。ホモトキシコロジーは、ホメオパシー薬を複合製剤として使用し、ホモ(homo=人)トキシン(toxic=毒)を解毒、排泄する治療法である。今回、口唇に出来た上皮向性皮膚型リンパ腫を、化学療法やビタミンAで治療せず、ホモトキシコロジーで治療する機会を得たので報告する。

【症例】雑種犬、去勢済み、15歳7ヶ月齢。左下口唇が、7ヵ月くらい前から徐々に大きくなってきたと来院した。飼い主は高齢を理由に、麻酔を使用した生検や、手術、抗癌剤、放射線療法等の腫瘍に対する現代療法を望まなかつた。ホモトキシコロジーでの治療に同意を得、以下の製剤の投与を開始した。Coenzyme compositum 1A 2mlとUbichinon compositum 1A 2mlを1週毎、ParaBenzochinon-Injeel 1A 1mlとGlyoxal compositum 1A 2mlは交互に1週毎、グルタチオン200mg 1Aを第5週から1週毎に皮下注射した。また、Lymphomyosot 1T bidの経口投与も行った。腫瘍は徐々に縮小していった。第137病日飼い主の了解が得られ、病理学検査を実施したところ、独立円形細胞腫瘍と診断された。腫瘍はその後も縮小し、第204病日(約6.5ヵ月後)には消失した。第162病日から、治療間隔を2週毎に延ばしていく時期に、右下口唇に病変が出現した。治療間隔を1週毎に戻す事で、右下口唇の病変も消失した。しかし、第354病日頃から、治療間隔を1週毎で継続しているにも関わらず、左下口唇に腫瘍病変が再燃、徐々に増大し、第606病日17歳3ヶ月で死亡した。第137病日の生検組織では、T cell markerのCD3は(+)で、B cell markerのCD20は(-)であった。また、クローナリティー解析では、T cell(+)、B cell(-)であった。第606病日(死亡後)に採取した腫瘍組織のクローナリティーは、前回同様であったが、CD3は(+)で、CD20も(+)に変化していた。

【考察】本症例はT細胞性の上皮向性皮膚型リンパ腫であった。ホモトキシコロジーは、1週毎の治療が効果的で、初期病変を完全緩解した。しかし、再燃病変を抑える事は出来なかつた。その理由として、生体側の変化としては、加齢、老化、免疫力の低下が考えられ、腫瘍側の変化としては、CD3(+)に加えて、CD20(+)の発現が確認された。ホモトキシコロジーは、本症例に対して、副作用も無く、17歳3ヶ月(606病日)まで生存しQOLを保てた事は、補完代替療法として、有用である可能性が示唆された。